M-H-F scale を利用した性役割観とその変化についての検討

問題・目的

日本では性役割観が変化してきているため，古くに作成された尺度を用いて現代の性役割観を測定することに問題があると考えられる。本研究の目的の 1 つは，既存の尺度である M-H-F scale（伊藤，1978）が，現代の性役割観を測定するために用いることが適当であるのかを検討することである。第 2 の目的は，M-H-H scale において期待される性役割観の程度に差があるのかを明らかにし，尺度作成時と現代の性役割観の変化について検討することである。

方法

大学生 177 名を対象に質問紙調査を行った。調査には M-H-F scale を用いた。男性役割を表す Masculinity，女性役割を表す Femininity，男女に共通し性差がない特性を表す Humanity の 3 因子各 10 項目で構成されている。(1)男性役割期待，(2)女性役割期待，(3)個人的評価について，各 30 項目 7 件法で回答を求めた。

結果・考察

まず，各項目が設定されている性役割観を示すかどうか t 検定を行った結果，一部の項目はその性役割観を示さなかった。続いて，男性役割期待と女性役割期待の計 60 項目について 2 因子を抽出した因子分析を施したところ，伊藤(1978)の結果とは異なり Humanity の次元を表す因子が抽出されず，Humanity が性差を持たない概念として扱えない可能性が示唆された。次に，確認的因子分析を行った結果，モデル適合度は良いとはいえず，Femininity の因子に問題があることが示された。これらのことから，現代で M-H-F scale を用いる際にはいくつかの課題があることが明らかとなった。一方で，M-H-F scale の信頼性については概ね満足できる結果が得られたため，M-H-F scale は従来の性役割を測る尺度としての有用性が示された。

次に，男性役割期待，女性役割期待，個人的評価の各因子の性差について t 検定を行い，伊藤(1978)の結果と比較を行った。Humanity を女性の方が高く評価している事は同じであったが，伊藤（1978）の結果とは異なり現代の大学生では Masculinity を男性の方が高く評価，Femininity を女性の方が低く評価する傾向を示さなかった。性差が確認されたため，期待される性役割観の程度の差について性別ごとに分けて t 検定を行い，伊藤(1978)の結果と比較を行った。その結果，伊藤(1978)の研究と同様，男女ともに男性には Masculinity が，女性には Femininity が期待されている事が明らかとなった。これらのことから，期待される性役割観について大きな変化は確認できなかったが，性別ごとの性役割の捉え方には変化があったといえる。